

一 檜原村 「数馬の一夜」(田部重治) — (7)

(岡本 記)

奥多摩、特に檜原村の山々は、低山歩きを嗜好する私レベルの好むところであるが、本格的な登山志向の者にとっては、視界にも入らない丘陵に過ぎないかもしれない。故に、檜原村の山々が岳人の紀行文や随想でとりあげられることは、稀有である。しかし、田部重治(注)は別格で村を幾度も訪れており、文章にも書いている。

檜原村をまとまって取り上げた岳人は田部重治くらいと言われている。東京空襲が始まっていた昭和20年4月、東京を離れて信州へ疎開する一月前、「檜原村」と題する小文を書いている。その中で、村人の生活や村に関心を持つに至った経緯を紹介した末に、「想いやれば、私の登山生活とこの村とのもっている因縁は一通りならず深い。…願わくは檜原村よ平和であれかし、いつ又訪ずれられるか分からない。秋川の流れのこんこんとして尽きないように、お身たちの和やかな、親切な、素朴な源泉の尽きることのないようにあれかし。…お土産で重くなつたルツクを背負いながら、五日市町まで歩こうと決意して、このなつかしい村をあとにふりかえりふりかえり秋川に沿う坦々たる大道を辿った。」と故郷を後にする哀惜にも似た情感描写で締め括っている。

田部の随想「数馬の一夜」は、山岳文学史上の代表的な作品であるとの定評を得ている。「数馬の一夜」は、大正9年(1920年)4月36才の時に、本宿(もとじゆく)一泊、御前山登頂、数馬一泊の二泊三日の旅(道連れ無し)を行い、同年の夏に書いたものである。

「数馬の一夜」の内容に入る前に、同じ「山と渓谷」本に掲載されている「山に入る心」(大正12年秋)において、道連れのない山旅について考察しているので触れておきたい。多くを原文に語らせる。

「自然の穏やかさと自然の包容的な普遍性とは、私の心に何物かを創造させるやうな余裕を与へてくれる旅…何等の奇をもつてゐない谷間の旅、穏やかな春の山里の旅、落日を追ひつつも宿までほど遠からぬ急がない旅…都会の喧騒をのがれ、背負ひ切れぬ心の重荷からのがれて…自分といふものをひしとつかむことが出来るやうに思える旅…それは慈母の如くに、悩める胸をなで、痛める頭をさするやうに煩へる心を和やかにし、心をのびのびとさせてくれる」と記し、そして、「私は今迄の内に、かうした経験を多摩川の支流秋川の上流を溯つた時最もよく味はつた。」と檜原村の秋川の山旅に触れている。

「数馬の一夜」の冒頭は「私は今、多摩川の支流南秋川の上流にある数馬村のひなびた宿屋(注、山崎屋)の座敷に火鉢を擁して秋川の潺湲(せんかん)たる音を耳にしながら坐つてゐるところである。」で始まる。数馬村の宿に投宿する前日は「早朝東京を出て八王子から平原を歩き、五日市を経て、南北秋川の合流点にある本宿の宿屋(注、橋本旅館)に平和な一夜を送つた」。明けて翌日は北秋川の溪流に沿うて歩き、上流の御前山に登攀してから更に南秋川の渓谷を分けて午後3時過ぎに数馬の宿に着いた。この時の数馬の宿、山崎屋への止宿は、明治44年(1911年)5月27才の時、木暮理太郎他と三頭山を登山した際に次ぐ2回目だと思われる。

道中では、朗らかな鳥の囀りを聴き、躑躅(つつじ)、木瓜(ぼけ)の花や白樺の若々しい芽生えを心ゆく程眺め、また秋川の清澄な水の色を見て俗塵に濁らされていた頭が澄みいくがごとき心持ちになつてゐる。数馬の宿の辺りは、南秋川の流れも幅2間に細まつた最上流で、峠を越えると甲州領である。夏も蚊帳を吊らない程の環境である。

田部は山旅というものを「10年ほど前から年に1、2度欠かしたことがない。しかし唯ひとり、こんなにもしんみりした、のどかな旅をしたことはあまりない。…今迄私が味はぶことの出来なかつたものを与へてくれた。」と述懐し、また10年前の木暮理太郎との数馬、三頭山の山旅を回想して、秋川の渓谷の半分以上もの道を夜に歩いたことや、浅間尾根の時坂で時鳥(まるとぎす)の哀音を聴いたことを思い出してゐる。この10年間に北秋川では3尺幅の小径が馬力が通れるほどに拡張され、あちらこちらの林が切り去られ製材所の響きが聞かれるようになってしまったことを残念に思いつながらも、他方で、南秋川の渓谷の奥では昔ながらの様子が残っていることを喜びつつ、「あたりの静けさ、谷川の響きが心の奥底で真の自分と融け合つてゐるかのやうな気がする」という情感に浸っている。

火鉢を擁して座っている田部は、火鉢の灰の表に火箸でどんな文字を書きつけながら、心の深奥に沈潜していったのではなからうか。人間、純粹、自己、軟弱、強靱、解放、自由などの字句のどの字に拘っていたのだろう。

「私は鎮めることの出来ない気持ちを抱いたままこの渓谷にはひつて来た。…私のいま感じてゐることは、如何にして自分を真に自分のものとして、そのうちに統一的な人間をこしらへるといふことである。…私はややもすれば外部の爲めに、気を配り易い性格をもつてゐる。…私は孤立した強さに生きなければならぬ。一切の判断を純粹な自分から誘導して来なければならぬ。余儀なく強ひられたる考えによつて行爲することまでも慈悲的な行動と思ふ軟弱を捨てなければならぬ。私にとつて一切の問題の解決は、只今のところ、たださうした気持ちに強く生きること存在する。」と自分を奮い立たせてゐる。私は学生時代の恩師が屢々「千万人と雖も吾往かん」と口にしていたことを思い出した。

田部は拘りついたもの全てから解放されて、その夜安らかな「数馬の一夜」の眠りに就いたのである。翌日は三頭山の滝を眺めてから5里の山道を上野原まで歩いて帰途に着いた。



「白雲にいのちありてか一片は 流れの上にあかず漂ふ 田部重治」

この句は武蔵小金井の古書店で購入した「山と溪谷」(萬葉出版社)本の表紙と著者の「はしがき」の間の頁に万年筆で書かれていたものである。前の読者のいたずら書きには思はず真筆の可能性が高いと観えたので、神保町の山岳図書専門店に赴き店主に尋ねたところ、「良い値で買ひ取るよ」と言う。また、その店の田部重治の古書にある、田部の字(印刷)と照合しても酷似しているので真筆間違いないと確信した。犬棒の幸運である。大切に所蔵する。

(注)田部重治(たなべじゅうじ) 明治17年(1884)生まれ、昭和47年(1972)没。東京帝大英文科卒、東洋大、法政大などで教鞭。「日本アルプスと奥秩父に大きな足跡を残した先駆者」とか「人生観照の登山姿勢」と評価されている。山に関する著作「日本アルプスと秩父巡礼」「山と溪谷」「わが山旅五十年」他多数。

参考資料

- 「山と溪谷」田部重治著 萬葉出版社 昭和23年11月刊
「山と溪谷 田部重治選集」近藤信行編 山と溪谷社 2011年12月刊
「山と随想」田部重治著 新潮社 昭和14年7月刊
「忘れえぬ山旅」田部重治著 三笠書房昭和43年12月刊
「山の絵本」尾崎善八著 岩波文庫 岩波書店 1993年5月刊
「大島亮吉 全集1 紀行」安川茂雄他編集 あかね書房 1969年12月刊